



第3回農学部国際シンポジウム「アジアにおける食料・農業・環境の持続可能性」  
21. 9.28～10. 1 会場（新潟大学総合教育研究棟（旧教養棟））

# 松涛

No.26

2010. 3. 10

## 主な記事

学部長挨拶	2
同窓会長挨拶	3
今年度の活動計画	3
農学部を去るにあたって	4
支部だより	6
職場紹介 株式会社 興和	8
特集 おいしさについて	9
ペンリレー 同窓生からのたより	11
農学部フォーラム	13
国際交流	14
中越大震災関係活動報告	14
学部だより	15

# 学部長挨拶

農学部長 大山卓爾



今年度は、新潟大学創立60周年にあたり各種の行事が行われました。農学部同窓会の皆様には記念行事へのご参加やご協力誠に有り難うございました。昨年、10月18日午前

に、農学部ホームカミングデーを実施し、同窓生の皆様に農学部の現状を紹介させて頂きました。入試、就職、国際活動、ときプロジェクトなどの現状を各担当教員から紹介致しました。参加された藤会長様や同窓会員の皆様から「断片的には聞いていたが、いろいろな話がつながり良く理解できた。」とのご感想を頂きました。ちょうど、60周年記念のため来日されていたモンゴル農業大学のビャンバール学長とゴンボジャフ副学長に

もご臨席賜りました。昼食には、農学部名物の手作りソーセージと震災ボランティアお礼のおにぎりを頂きました。午後からは、新潟大学60周年記念式典、ノーベル物理学賞を受賞された益川先生の御講演を伺い、その後60周年記念パーティーが盛大に開催されました。

最近の農学部の話題をいくつか紹介させて頂いた。だきま

昨年5月から行なわれていた農学部B棟の耐震工事が予定通り本年度内に完了予定です。外見はさほど変化ありませんが、内装は大変きれいになりましたのでぜひ一度ご覧下さい。平成22年度には、A棟の改修が行われます。

受験生などに農学部を紹介するDVDが完成し、1000枚作成しました。農学部同窓会からのご援助誠にありがとうございます。高校での紹介などに有効に活用させて頂いております。このビデオ

は農学部ホームページでもご覧頂けます。また、ホームページに各教員の研究活動を紹介します。また、「教員紹介」の「氏名をクリックしてください」。

農学部の国際交流も活発に続けております。昨年の9月には新潟大学において、第3回農学部国際シンポジウムを開催致しました。参加校も、これまでの協定校であるポゴール農科大学（インドネシア）、モンゴル国立農業大学、嶺南大学校自然資源大学（韓国）、チェンマイ大学（タイ）、ワヘニンゲン大学（オランダ）に加え、新たに協定を締結した中国農業大学、キングモンクトン大学（タイ）、および、昨年農学部学生3名が訪問したプトラマレーシア大学からも参加がありました。今回は、教員だけでなく、各大学から大学院生や学生を呼びました。シンポジウムにおいても、学生独自の企画コーナーを設け立派にやり遂げてくれました。また、阿部信行先生はじめ森林関係の先生方と長い交流実績があるロシアのクラスノヤルスク農業大学からイゴール・ダニリン教授をお招きし、その後、私と中野国際

交流委員長が訪問し、交流協定の調印と継続的な交流をめぐらせています。ただし、ロシアでは、大学の統合再編が進んでおり、クラスノヤルスク農業大学はシベリア連邦大学に統合予定とのことで、新潟大学とシベリア連邦大学の協定締結の方向で検討しています。

# 同窓会長挨拶

同窓会長 藤 隆



河渡の農学部校舎跡地は、現在には県立東高等学校となっております。

今年（2009）は大学創立60周年記念事業として10月18日に記念式典・講演会（京都大学名誉教授益川敏英先生、各学部のホームカミングデーの実施、アースコンシャス・フォトコンテストやグッズ等盛りだくさんの事業が行われました。特に新潟大学ブランドの酒

「新雪物語 華甲」は農学部で収穫された「越淡麗」を用いて地元の酒造会社で醸造された大吟醸酒で好評です。農学部のホームカミング

# 2009年度活動計画

幹事長 阿部 信行

デーでは、学部側から学部の現在重点取り組みをしている入学・就職、国際交流、ダブルホーム、大学院G.P.酒造プロジェクト、地域連携ビールプロジェクト、ときプロジェクト、食品超高圧プロジェクト、災害復興関係等教官と院生・学生が鋭意取り組んでいる様子が良く理解できました。

改修が行われれば「嵐丘庭」や前庭の樹木の伐採が行われると思われず。先輩諸兄のご尽力でつくられた環境をどのように再生するかが今後の課題となります。

に当たる場合は在校幹事に一任するのではなく、同窓会事務局と密接な連携を取る中で独自の事務局運営が不可欠ではないかとの意見がありました。

若い世代にも農学部同窓会に関心を持ってもらえるよう、学生の国際交流を支援するなど活性化に努めていきます。また、全学同窓会にもこれまでどおり協力していきます。

5、学術・文化活動への支援  
農学部や各学科が行う学術・文化活動に支援します。学生の国際交流活動を支援します。

今回のホームカミングデーでの同窓生の参加者が少なかったことが残念であり、今後おこなわれる場合は学部と同窓会との協調で同窓生への周知を図る工夫が必要かと思われず。

また、国立科学博物館で開催（12月11日から12月20日）された大学サイエンスフェスタでは「新潟大学超域朱鷺プロジェクト」等が展示され農学部の教官・院生・学生が精力的に取り組んでいる様子が良く理解できました。

さらに、全学同窓会の賛助会費納入につきましても特段のご協力を賜っておりますこと感謝申し上げます。全学同窓会では経済的基盤強化のために協賛企業数の大幅アップを目指して各学部同窓会での取り組みが求められており、本会でも役員で同窓生の就職者数の多い新潟県内企業を中心にお願いに上がりたいと思っております。その節はご協力のほどお願い申し上げます。

2009年度は、以下の活動に取り組みます。

- 1、「松涛」26号の発刊  
今年も充実した内容を企画し、読まれる会誌をめざします。

6、よりよい学生に入学してもらうための施策に支援  
「高等学校での出前講義」や「高等学校での学部説明会」に旅費支援を継続して行います。

また、国立科学博物館で開催（12月11日から12月20日）された大学サイエンスフェスタでは「新潟大学超域朱鷺プロジェクト」等が展示され農学部の教官・院生・学生が精力的に取り組んでいる様子が良く理解できました。

また、協議題は同窓生の親睦・懇親を深めるために新潟県支部を創設したらどうかという事です。支部創設は昨年来の課題であり幹事会では業務多忙となり創設は不可能でないかという意見集約でした。しかし、他県支部は年1回の総会を開催し意見交換と親睦を深めております。同窓生の最も多くお住まいの新潟県でも支部を結成し年1回の会合を開催し同窓会・学部の現状を知り親睦を深めることが大切かと思えます。

本会が会員相互の親睦と母校への支援を使命として益々充実した活動ができるよう役員とともに努力してゆきますので、皆様のご協力と活動への積極的参加を改めてお願い申し上げます。

2、同窓会ホームページの更新  
新しい情報をお届けできるように更新していきます。

7、全学同窓会への協力  
運営委員会への参加、カード入会事業の協力、大卒との懇談会や全学交流会への参加、機関誌「雪華」の発送など他学部同窓会と足並みを揃えた活動を行います。

今年度、学部ではB棟の耐震補強をとまなう大規模改修工事がおこなわれています。同窓生の多大なご協力で作庭された「嵐丘庭」も工事の関係でかなりの樹木が移植若しくは伐採されました。今後

今後鋭意取り組むことで役員会で了解されました。ただ、新潟県支部が結成されて運営

会員の皆様の益々のご健勝とご発展を祈念し、会長の挨拶とさせていただきます。

4、学内諸行事への支援  
「卒業祝賀会」に支援。「退職者記念品の贈呈」を行います。



# 農学部を去るにあたって

## 君胸の灯の燃ゆるとき



伊藤 忠雄（農業生産科学科）

遂にこの欄に登場させていただくことになりました。まづもってこれまでご指導とご厚誼をいただいた先輩を始め同窓生の皆様に深謝申し上げます。

本学を卒業してすぐ助手に採用されたため、学生気分が抜けず呑気に過ごしていましたが、そうした鈍った体をビシビシ鍛えていただいたのは「地域」であつたように思います。

最初の試練は、卒業間もない時期に依頼された亀田郷土地改良誌の編纂業務でした。司馬遼太郎も絶句した「芦沼」から都市化へ激動の時代を駆け上がった地域の農業・農村の足跡を時代背景や営農の実態等様々な視点から検証して執筆するという仕事でしたが、時には編纂室長からの鋭い指摘や議論にたじろぎながら文献をあさり、多くの農家を訪ね歩き必死に執筆したことを思い出します。同じような低湿地で米づくりに苦勞してきた父母や兄の姿とも重なり、この仕事にのめり込みました。かくして五年余をかけて上梓

された「水と土と農民」（七二四頁）は青春の記念碑となりましたが、これを起点に地域農業に対する関心が深まっていたことを憶えています。

そうした折に、亀田郷とは対照的な山間地域農業の調査研究の機会が訪れました。過疎化という現実には衝撃を受けながら県内の棚田地域を歩き回り、高度経済成長が映しだす陰の農村問題に嵌り込んでいきました。

新潟平野や佐渡の村むらには卒業論文以来、随分と歩きました。とりわけ、稲作生産組織・法人を先駆的に運営する若く逞しい農人の群像に接しながら、この穀倉地帯の明日を確信していました。

こうしてあぜ道を歩きながら収集し、いまや古色蒼然となった調査資料の山が、恰も恋人との思い出の品々のように未練がましく捨てきれずに残っています。

外に出かけて研究室に戻る時、その日見聞した様々な地域農業の動きをよく学生相手に話

したことを思い出します。その頃、飲み仲間のよう親しんだクラスが先ごろ囲む会を開いてくれました。中締めで「農学部学生歌」の合唱となり、歌いながら研究室ではるかなる追憶



樋浦 善敬（農業生産科学科）

## 母校での47年間に感謝

の日々が彷彿と蘇り、感慨深く感じました。「♪君胸の灯の燃ゆるとき」

この灯りを戴きながらキャンパスを去りたいと思います。有り難うございました。

昭和38年（1963）に農学・農業に憧れて新潟大学農学部に入學し、卒業と同時に新設された畜産学科学科畜殖学教室に残り、47年間の間、農学部から一歩も離れることなく過ごしました。いよいよこの三月で退職です。「光陰矢のごとし」のように瞬時に通り過ぎた感じがよい。学生諸君との「出合い」は

すばらしく、「若さ」をいただいたことで充実した教員生活を送ることができました。私は農学の一部門としての畜産学の教育研究に携わってきましたが、畜産業界とともに発展してきた畜産学は近年にいたつて生命科学の学問に包括され、畜産学の名称もほとんど見られなくなり、現在の所属は農業生産科学科動物生産学コースとなっております。

研究は家禽を対象に「卵胞成長と卵卵序列性」「卵管の運動性」「卵管内精子の移動・貯留・受精」「鳥類の性比」「繁殖技術の開発」「二黄卵の産生・受精・

胚発生」の解明に多くの専攻生諸君共々、鶏舎や実験室で研究の楽しさと苦しさを味えながら汗水を流しました。動物の世話などで土・日曜日でも休みをとれない中、一緒に活動してくれた専攻生は在任中232名、一人も抜けることなく巣立つて行きました。彼らとの思い出は語りつくせないほどたくさんあります。私は40才頃に呼吸疾患に罹り、大ショックを受けました（肺活比は現在でも40%台。生活様式を変え、身体と相談しながらの活動で苦しいこともありましたが、それを糧に目指していた家禽繁殖学を全域にわたつて学ぶことができて良かった。支えてくれた大勢の方々に心より感謝申し上げます。学生の人工授精師資格取得のために、「牛の人工授精講習会」の世話で三十数年間担当しました。講習会では前橋の種雄牛センターでの実習と村松ステーションでの授精実習用の発情牛の準備に毎年難儀

しましたが、最近専門の先生が赴任し、さらなる充実が図られるようになりました。資格取得者は500名超と推定されますが、活用しているのは何人位いるのだろうか。

本年度、校舎の老朽化で改修工事が始まりました。その準備で教室内の卒業論文、写真、レポート、実験設備・器具等を整理しながら、しばし時間がとまり恩師の河野先生と山本先生をはじめ当時の学生諸君、教職員との様々な出来事が懐かしく思い出されました。新潟地震で農学部校舎避難所、大学紛争で農学部本館占拠・農学部体育館での卒業式・県立女子短大での入學試験、大学再建と大学民主化、農学部大運動会、河渡校舎お別れ会、移転直前の五号館火災、五十嵐キャンパスへの移転、入

試制度の改善、総合大学院の設立、大学改革、学部改組で畜産学科学科の分割、大学院改組、大学の独立法人化等。

終わりに、教育研究活動の基本をご指導してくれた河野先生と山本先生、活動を支えてくれた同僚の祝前先生（現在京都大学）はじめ動物コースの諸先生、そして専攻生諸君、教職員の皆さんに厚くお礼を申し上げます。農学部と同窓会のさらなるご発展を祈念して、感謝の言葉とさせていただきます。そして鶏に合掌。

合掌。



## 農学部を去るにあたって

阿部 信行 (生産環境科学科)

北海道立林業試験場から異動して16年が経ちました。大学に来る際、衛星リモートセンシングに取り組むことに決めていました。前職場では、自由にテーマを選択することは不可能でした。同じ研究室の同僚が行っていたリモートセンシングに関心があり、大学に赴任してすぐ勉強を始めました。当時、大学には解析機器もなく、パソコンのみがあるような状況でした。しかし、何とか研究を始め今日までに4名程、リモセンで博士号を取得させることができました。忘れもしませんが、平成16年7月13日、三条で大きな水害が起き、農学部で何ができるのか、皆で話し合いました。その時、水害後の7月24日、三条付近の衛星画像を見ると、冠水した水田が、冠水していない水田かがはっきりと識別できました。それまで衛星画像で詳しく水田をみたことがなく、非常に驚き、水田に詳しい先生方にみて頂きました。秋には冠水後の水田収量を福山先生らと調べました。一連の調査も終わり、報告会が10月23日栃尾で開催され、終了後に本来の森林を対象にした研究に戻るつもりでし

た。大学に戻ってみると何か、様子がおかしい。大きな地震があったとのことで、早々に家に帰りました。その地震こそ、中越大地震です。衛星画像を取り寄せてみると、被害状況がくつきりと画像に表れています。結局、地震後の様々な動きに引きこまれましたが、貴重な経験でした。もし、赴任した際、解析機器がなくても敢然と衛星リモートセンシングの研究に取り組まなければ、今の状況とは大きく異なっていたと思います。復興支援のことで福山先生とその後色々な活動をしてきました。

一方、衛星リモートセンシングの知識は、赴任と共に始めたシベリア北方林の研究にも大いに役立ちました。

私は森林外の領域で他学科の教員と色々な仕事ができました。ことを非常に感謝しています。色々な業務があることを割り引いても、大学は誰に遠慮する必要もなくやりたいことをやる場と思います。皆様には、どうか健康に留意して頑張ってもらいたいと思っています。

今日まで何とかやってこられたのは、自分を支えて頂いた教



## 農学部での24年間

福山 利範

(ライルド科学教育研究センター)

職員の方がた、研究室で共に調査・研究を行った学生諸君の協力のおかげです。心より感謝申

し上げます。最後に農学部の更なる発展を祈念して、感謝の言葉とします。

昭和61年5月に倉敷から赴任して以来、24年間があつたという間に過ぎた。当時、北陸高速道路は全通しておらず、朝日から上越までは一般道を走った。親不知・子不知では、くねった道路に緊張しつつも、瀬戸内海とは全く異なる日本海を堪能した。それにしても、1300ccの小型車で走るには新潟県は長かった。倉敷から新潟はおよそ800kmの長距離ドライブであった。

新潟は豪雪地帯で二階から出入りするとの噂も聞いていたので、着任後手始めのテーマとして大麦の耐雪性を設定し、村松の圃場に約1300品種を播種した。ところが、この年以降記録的な暖冬少雪年が続き、耐雪性についてデータが得られな

かった。気落ちしていたところ、倉敷では見たことがない病斑が目に入り、しかも品種間差異が驚くほど明瞭であった。これが「大麦雲形病」との初めての出会いであった。当時の植物病理学研究室の和田先生(故人)に菌の培養も含め、雲形病について

ろ、日本型とインド型で大きく異なることを見つけた。この穂首維管束は、その後高温登熟耐性とも深く関わる事が判ったが、稲の進化過程でどのように分化したかについては、今もって不明であり、残念至極である。

農学部での後半はライルドセンターとの関わりがきわめて深い。平成13年の学科改組で新たにできたセンター企画交流部に席を移した。農学部の地域への窓口的立場にあり、学外へ出ることが多くなった。水害、地震の調査や支援ボランティア、県の遺伝子組換え条例作成や各種委員など、かなり忙しくなつた中で、お付合っている小国町森光集落が村づくりで大臣賞を獲得したことは望外の喜びであった。センターの活動では同窓会に多大な援助をいただくことがあった。記して深謝申し上げますとともに、会の益々の発展を祈念する。



# 支部だより

## ◆首都圏支部

今年の総会は若い会員の方にも多く集まってもらおうとして、昨年同様土曜日開催、アクセスの良い銀座・有楽町周辺にすることにし、第23回総会を6月13日(土)12時から銀座日航ホテルで開催しました。群馬や栃木からの参加も含め会員26名、来賓4名の30名が出席しました。



最初に横山耕治氏(農化院昭50年卒)から「カビと病気」の演題で講演をして頂きました。横山氏は、真菌(カビ・酵母)は進化の流れの中で様々な形態と病原性を獲得してきたこと、カビの培養基上の形態と顕微鏡像及びその病原性、輸入真菌症・アスペルギルス症・水虫等の病気の原因菌であることなどをわかりやすく話されました。引き続き総会に移り、来賓としてお招きした伊藤忠雄教授(農学部)からご挨拶を頂き、農学部の近況を Power Point を使って説明して頂きました。次いで、首都圏同窓会の鈴木事務局長からご挨拶を頂きまし

た。その後、昨年度の活動報告、会計・監査報告を行い、承認を受けました。更に懇親会に移り、樋口初代会長の音頭で乾杯をした後、楽しい懇談に移りました。テーブルを囲んで、ホテル料理を味わい、お互いの近況等を語り合いました。今回は、東京事務所黒瀬教授、菊池医学部同窓会長、農学科の先輩、女性3名にも出席して頂きました。今後、も首都圏在住の会員の方の出席をお願い致します。

佐藤 純一(昭47農化)

## ◆福島支部

福島県支部は、平成7年5月に小島誠農学部長、伊藤忠雄教授をお迎えして設立総会を開催してから本年度15年目となります。現在、会員数は1,553名で、概ね2年に1回総会を開催しています。

支部では設立当時から会長を務めていただいた4回(昭和31年)卒の楠智宏さんが亡くなられてから、しばらくの間会長が不在でしたが、前回、平成20年度の総会で第5回(昭和32年)卒の高久英昭さんが会長に選出され、現在は高久会長のもとで活動しています。

福島県は、都府県では岩手県に次いで県土が広く、地形的に太平洋側から浜通り、中通り、会津と3つの地方に分かれています。本支部の会員も各地方に広く居住していることから、こ



れまでの総会は、県のほぼ真ん中で交通の便が良く、集まりやすい郡山市で主に開催してきました。設立総会は50名以上の会員出席の中で開催されましたが、会を重ねるにつれて次第に出席人数が減少するとともに、出席者の顔ぶれが固定化してきており、特に、若い会員がなかなか出席していただけなのが事務局の悩みの種となっています。

このため、事務局としては2年に1回総会を開催するのみではなく、例えば、会員に対して同窓会情報や大学の最新動向などについて情報を提供するなどの活動について検討する必要があります。今後は、他県の支部活動状況等を参考に、高久会長や役員と相談のうえ同窓会活動の活性化に向け検討したいと考えています。

なお、本年は6月頃までに総会を開催する予定としておりますが、15年目の節目の年でもあることから、できるだけ多くの会員が出席していただければ十分な準備を行いたいと考えています。

沢田 吉男(昭56農)

## ◆長野支部

支部結成以来10数年を経過しましたが、支部(会長 松坂賢)総会への出席者は目標の20

人には達せず10数名と増えない中で、本部のご支援を受けながら毎年開催を続けています。

長野県支部の特徴について書かせていただきます。開催月は9月、2月と年により異なります。開催地は長野市で駅前あたりを会場とすることが多いです。午後3時総会開催続いて懇親会となります。県内各地から集まりますが、長野市近辺在住者が多いです。農学部出身者でも職業は様々で、異業種交流の観があります。自動車、食品製造、建設業、農業試験場(作物・園芸・畜産・林業)、県職員、市役所職員、JAなどです。日頃、見たことができないこと、聞いたことのない話を聞くことができます。懇親会では酒飲みの特権で、話し手の話を聞き質問はしますが、否定をする人はいません。また、難しい話はしません。



知らなければそのまま通りすぎますが、こういった機会に触れ合うと県内でも、同窓会出席者とは意外な場所でお会いできる元気をいただきます。話を聞いてみると、海外で活躍の経験のある方が多いです。バンングラデッシュ・アルゼンチン・アフガニスタン・ドイツなどの話が聞けます。また、県外から長野県に来られ居住されている方の集まりともなっております。富山・新潟・福島県の方がおられます。長野

## ◆富山支部

富山県支部は、平成21年7月17日(金)、農学部副学部長(教育担当) 生命・食料科学系列長 農業生産科学科の新村末雄先生をお招きし、44名の会員が出席して、平成21年度支部総会・懇親会を盛大に開催されました。総会では、中山敏明支部長(39卒)の挨拶で、6月に新潟市で開催された同窓会常任幹事会の報告があり、続いて、新村先生から「新潟大学の教育に関する新しい取り組み」と題して、大学の近況や農学部の動向についてお話しいただきました。

中でも、現在、大学では、成績が付けられるのは学生だけでなく、教員においても新潟大学の全授業科目を対象にして、学生の目で授業評



中でも、現在、大学では、成績が付けられるのは学生だけでなく、教員においても新潟大学の全授業科目を対象にして、学生の目で授業評

価を実施し、その結果を学内向けにWebで公開することで、各教員の授業改善に活用するという取り組みが紹介され、今から30数年前、まだキャンパスが「五十嵐砂漠」と呼ばれた頃に学生時代を送った私たちにとっては、まさに隔世の感がありました。その他、農学部がトピックとして、農学部校舎の改修工事が平成22年まで予定されていることや、ここ数年、農学部の入試競争倍率の低下が起きてきており、受験者を集めるのに苦労していることなどが報告されました。

懇親会に移り、出席者同士旧交を温め、河渡や五十嵐キャンパスで学生時代の思い出を語り合うなど終始和やかなひとときとなりました。会の締めには、恒例となった農学部学生歌を全員で肩組み、声高らかに歌い、つかの間の学生気分になりました。現在、支部会員は351名の登録がありますが、富山県支部においてもご多分に漏れず支部活動に参加して下さる会員が少なくなってきたり、その会員との連絡に関して、事務局としても苦労しております。今後とも中山支部長を中心に、支部活動が将来にわたり持続的に発展できるように、役員一同、心新たに会を支えていきたいと思っております。

橋本 正義(昭53農)

## 福井支部

福井支部は、今年も冬の味覚の王者「越前がに」が最盛期の11月20日(金)に、福井市内のい

つもの居酒屋で県内在住の同窓生22名(うち女性1名)が集い、盛大に「福井松涛会」の総会を開催しました。今回は、4年ぶりに新卒の野崎智也氏(H21地域環境科学)を迎え、紅一点の安貴千智氏(H17地域環境科学)も参加し、賑やかな総会となりました。

総会では、北岡欣一会長(S43農業工学)が次期会長として橋本孝一氏(S45農業工学)を指名し、出席者の全員一致で承認されました。

続いて開かれた懇親会は、北岡会長の挨拶と乾杯で幕を開け、昨年めでたく喜寿を迎えられた多比良樹徳氏(S29林学)から、古き良き時代の思い出や現在の活動(趣味)についてお話しいただきました。なんと中国辺に出かけて貴重な石(そこから取られた)の採集を手がけておられたとか。今なお元氣なお姿に、唯々敬服です。

最初はやや緊張した中でのスタートでしたが、すぐに懐かしい新潟の青春時代にタイムスリップ。五十嵐キャンパスでの思い出や今の仕事での悩みなど、年の差は50歳余り離れている人もいます。が、新潟大学農学部で4年間(場合によってはそれ以上)過ごしただけで、こうやって酒を酌み交



わすことのできるの、やはりいいものです。

過ぎいひとはあつという間に過ぎ、最後に、橋本次期会長が次回の再開を期して、総会を閉め、散会となりました。

次回の事務局長には佐々木一恵氏(S49畜産)にお願いすることとなりましたが、今回同様、同窓生の皆様に大勢集まっていたと思います。盛り上げてまいりたいと思います。

最後になりましたが、昨年6月に病気で亡くなられた千田秋廣氏(S44農業工学)に対し、深くご冥福をお祈り申し上げます。

仲谷 傳次(昭53農)

## 北海道支部

本年度13回目を迎える新潟大学農学部北海道同窓会の総会は、10月17日(土)に、札幌市の北隣の石狩市にある「石狩温泉番屋の宿」で開催致しました。

今回の会場は、会員が多く交通のアクセスが良い札幌近郊としました。他に予定がある方、急用が出来た方などもあり、出席は6名にとどまりました。さて当日夕方、夕日は既に日本海に沈んだものの、石狩浜を一望できる露天風呂を堪能した後、午後6時から総会を開催しました。

新任の成田会長の挨拶の後、五十嵐が平成21年度経過報告・会計報告、平成22年度事業・予算案を協議し、それぞれ承認されました。同窓会常任幹事会報告では、大学開学60周年行事や、学生の授業態度に関する進藤会長のコ



メントなどについて報告致しました。総会に続く宴会では、この宿を推薦して頂いた坂本さんの乾杯の後、石狩地ビールと

石狩鍋を味わいながら近況報告などを語り合いました。その後、成田会長が持参した六花寮寮歌のCDを聞きながら「出席者が少なくても顔を合わせる機会があるといいね」などと賑やかなひとときとなりました。今回も、石塚副会長から提供のあった広尾産の「海の幸」を手にとり、それぞれ帰途につきました。

五十嵐龍夫(昭51農)

## 秋田支部

秋田県では、平成21年9月に秋田大学で園芸学会秋季大会が開催されました。秋田県支部では歓迎行事として岡崎教授、中野准教授、学生の皆さんと交流会を開催し、秋田のお酒や郷土料理を味わいながら楽しく情報交換させていただきました。また、秋には秋田の農業の祭典である第132回秋田県種苗交換会がありました。今年は10年ぶりに秋田市で行われ、都市と農村、生活者と消費者、農と商工の新たな連携と交流を掲げた新たな切り口での都市型のイベントは105万人の入場者があ

り、我が同窓生も大いに活躍したところだ。

さて、平成21年度の秋田県支部活動ですが、去る7月4日秋田ビューホテルで総会が開催されました。総会では、新潟大学農学部PRのDVD鑑賞がありました。近年の学部の取り組みを見た会員からは「なつかしめである。キャンパスはご無沙汰だ、学校さ行きでな。」などの感想がありました。また、岩野先生から県立大学と新政酒造が共同開発した純米吟醸酒「究(きわむ)」のご披露があり堪能させていただきました。

12月5日には忘年会を行いました。参加者は常連の会員が多く、女性会員や新規会員の出席がごぶさたしていましたが、今回は、新規会員の女性1名の参加がありました。若者が極端に少ないおじさんグループの集まりに、まさに一輪の華麗な花が咲き、いつもより楽しい時間を過ごさせていただきました。若者の参加は本当にパワーがあります。今後は、新たな会員の参加を促進するた

め、宴会のほかに様々なオプショナルを加え、会員の皆様の参加数が向上できるように支部活動を充実させてまいります。

生駒 隆一(昭61農化)



## 職場紹介

# 株式会社 興和

月岡 浩（平9生環）

## 沿革

株式会社興和は、前身である興和地下建設（昭和34年創立）を経て、昨年創立50周年を迎えました。昭和30年代、新潟県は天然ガス、地下水、温泉など地下資源の開発に力を入れており、当社はその潮流に乗って現在の基礎を築きました。そして高度経済成長期を迎え、社会資本整備の拡充と頻発する斜面災害によって、当社は鍛えられ成長してきました。

当社の核をなしている現業3部門（調査部・工事部・水工部）は、地すべりや地盤沈下、豪雪といった災害が多発

する新潟県において、高い専門性を有した「防災のエキスパート」として、積極的な対応で取り組んできました。そして、災害で得た貴重な経験を生かし、現在では北陸、東北エリアにも営業基盤を拡大しています。

また、環境対策技術等の新分野や新技術の開発にも力を注ぎ、低炭素化社会に貢献できるような全社的に取り組み始めています。

## 【業務概要】

当社の事業内容は大きく分けて、①斜面崩壊・地すべり対策工事等の調査・設計・施工、②構造物基礎地盤の調査・

設計・解析、③消融雪施設の調査・設計・施工、④地下水・エネルギー・雪氷等の調査、であり、業務のほとんどを公共事業が占めています。

当社の特徴は、コンサルタント業務と施工のどちらも行えることです。突発的な災害で緊急対策が必要になった時など、自社単独ですべてを担当することが可能です。このため、甚大な被害をもたらした中越地震や中越沖地震、また平成16年の新潟豪雨災害などでも、各部門が連携して被災地に対応し、発注者から高い評価をいただきました。

## 【当社の新潟大学

### 農学部出身者】

当社の従業員数205名のうち、新潟大学農学部の卒業生は8名です。出身学科は、農業工学3名、林学2名、生産環境2名、応生1名となっています。また所属は、社長を筆頭に、調査部3名、工事

部2名、技術開発室1名、出向1名となっており、各人が専門技術を生かし、それぞれの部署で活躍しています。

昨今の公共事業削減という流れもあり、決して右肩上がりとは言えない状況ですが、地震や地すべり、豪雪といった自然災害は突然やってくる。私たちは、そのような災害から、生活する方々の命、財産、生活を守るため、これからも立ち止まることなく技術の研鑽に努める所存です。（なお、写真には本社およびその周辺にいる者しか写っておりませんが、全員各地で活躍しております）



後列左／月岡 浩（平9生環）・後列右／栗原 章（平8応生）  
前列左／越田宗克（平3農工）・前列右／島原利昭（昭43農工）



# 特集 おいしさにについて

## お米のおいしさにについて

農学部応用生物化学科

教授 大坪 研 一



おいしいお米（ごはん）の条件としては、

竹生新治郎先生によると、「飯が白くてつやがある（外観）」、「ほのかな芳香がある（香

り）」、「噛むと「ほとんど音がせず（聴覚）」、「軟らかくて適度の粘りと弾力があり（物理特性）」、「わずかに甘くて旨味がある（味）」飯が好まれ、視覚・嗅覚・聴覚・触覚・味覚の五感に訴えると言われています。「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「はえぬき」などの良食米品種、新潟、宮城、山形などの良食米産地があることはよく知られています（産地品種銘柄）。気象条件や施肥条件が食味に影響し、貯蔵によって古米化すると食味が低下しますし、精米時に割れた

り、糠が多く残ったりすると、やはりおいしさが低下します。洗米や加水の条件、炊飯器の種類、蒸らしの有無などによっても、ごはんのおいしさは違ってきます。

お米のおいしさの評価には、人間の五感をセンサーとして評価する「官能検査」、おいしさに関係する成分や物理特性などを測定しておいしさを推定する「理化学的評価」があります。「官能検査」は最も基準的な方法であり、総合評価に加えて、外観、味、香り、硬さ、粘り等の多面的な評価値が得られますが、国や地域、あるいは個人の嗜好によつて変動し、評価に労力と試料量を要するという問題もあります。官能検査については、食糧研究所の吉川らが基本的方法を開発し、旧食糧庁

や（財）日本穀物検定協会などで用いられています。最近では、米国農務省のBetteや、内藤ら、相島らによつて、嗜好的要素を排除した分析型官能検査が提唱されています。

「理化学的評価」は少量の試料と労力によつて普遍的で客観的なデータを得ることができるといふ長所があります。が、あくまで間接的な食味推定です。したがって、米の食味評価には官能検査と理化学的評価の両方が必要とされています。理化学的評価については、食糧研究所の谷らの「6要素による食味の推定」や、新潟大の倉澤らによる「米飯の粘り、香味、色沢」を重視した食味評価、農事試験場の榊・藤巻による「炊飯米光沢検定」、北海道立農試の稲津らによる「アミロースとタンパク質による評価」、穀検中央研究所の竹生らによる「5変数の多重回帰分析による食味推定式」などがよく知られています。

新潟コシヒカリがおいしいお米の横綱であることは誰もが認めるところですが、北海道の「おぼろづき」や「ゆめぴりか」、山形の「つやひめ」、九州の「にこまる」など、ラ

イバルの追い上げも急です。新潟県では、すでに高温に強い「こしいぶき」が早生の良食米品種として開発されていますが、本年度から、晩生の良食米品種育成事業も開始されています。最近、タンパク質による区分集荷も決まり、魚沼や岩船などの極良食米地域に加えて、上越や長岡など

の県内地域ごとの良食米米の地域ブランド化が様々な形で進められています。筆者らの研究室においても、新潟県や独法研究機関と協力し、老化性評価も取り込んだお米の理化学評価手法の開発やDNA食味推定技術の開発に取り組んでいます。

## コシヒカリの誕生・進化和これからの品種改良

新潟県農業総合研究所作物研究センター

センター長 長 澤 裕 滋

（昭50農）



新潟県と  
いえば、「米  
がおいしい  
い」と言わ

れるが、コシヒカリに代表される新潟米の名声は一朝一夕に得られたものではない。古い話となるが、農林一号が新潟県の奨励品種となつたのは昭和六年で、短強稈で多収の極早生品種であり、品質・食味の優れた画期的な品種であった。それは、それまで「とりまたぎ米」と酷評されていた新潟米の評価を大きく変えるものであった。コシヒカ

りは昭和一九年に長岡の地で農林二二号を母に、その農林一号を父に交配され、昭和二三年に一部の系統が福井県に譲渡された。残された系統から昭和二八年に「越路早生」が育成され、良質・良食味・多収品種として、コシヒカリと替わるまで新潟米の品質向上に貢献した。福井県で選抜された「越南一七号」は昭和二八年から三年間収量や特性について新潟県を含む全国で調査された。その結果、中生で極良質・良食味で収量も比較的高いという長所があった

が、いもち病に弱く、長稈で倒伏しやすい欠点があった。

しかし、この欠点は栽培法で克服できるとして、その食味・品質を重視し、昭和三十一年に奨励品種に採用した。先輩達の先見の高さで、今日の新潟米の礎が築かれた。

コシヒカリの欠点である長稈で倒伏しやすい点については、栽培方法の研究・普及、そして何より農家の努力で克服された。しかし、いもち病に弱い点については栽培方法だけでは解決できず、農薬に頼ることがあった。近年、消費者の食に対する安全・安心の期待は大きくなってきている。

そこで、コシヒカリの強力なブランド力を活かしながら、この期待にこたえるため、進化した米として、コシヒカリBLの育成を始めた。「安全・安心な食」の供給という県の姿勢を示すため、平成十七年から県下一斉切替えを実施し、現在九五%程度はコシヒカリBLに替わっている。この品種は稲姿や品質・食味はコシヒカリと同じだが、いもち病に抵抗性を持つ品種であり、従来からの交配・選抜法で育成されたものである。その結果、いもち病防除薬

剤の出回り量は切替え以前に比べ二七%に減少したにもかかわらず、穂いもち発生面積率は激減した。また、農薬の使用量を三割以上減らした田面積は約九倍と急増している。食味に関しても消費者や卸業者からコシヒカリと同様の高い評価を得ている。

また、気候温暖化に対応して良質・良食味の早生品種「こしいぶぎ」を育成した。稲一株の米から食味を推定する方法や、稔る時期に人工的に高温を与えるほ場を利用する等、全国に先駆けて新たな育種方法を駆使して開発された。もうひとつの温暖化対応として、コシヒカリより遅く稔る極良食味・晩生品種を重点的に育成している。さらに米粉(麵)用品種や香り米、赤米等も世に送り出している。これからの将来の方向を見据えながら「コシヒカリを超える米」を目指して、品種改良を継続

していくが、大学からこれまで以上に指導をお願いいたしませ



## 衛星データをを用いて 食味を向上させる稲作管理

農学部生産環境科学科

教授 阿部 信行



食味に優れた米は、タンパク含有率が低い

ことがよく知られています。出穂期に窒素肥料を多く与えると、稲は元気になり、収量は増えますがタンパク含有率が多くなり、食味は落ちます。窒素肥料を多く与えようと、稲の葉色は緑が濃くなり、逆に窒素肥料が少ないと、葉色は薄い緑色になりタンパク含有率も低下します。このように、葉色とタンパク含有率には一定の量的な関係式が成立します。衛星データは人間の眼には見えない波長も利用できます。8月下旬から9月上旬・中旬にかけて撮影された衛星画像の色々な反射値(輝度値)と水田から収穫された米のタンパク含有率の関係性を調べてみますと、近赤外波長と赤波長を組み合わせた指数や緑波長とタンパク含有率には一定の関係があることを

確かめています。解析した箇所は川口町武道窪地区、山古志地区です。今年(平成21年)は川口町の衛星データは8月24日に撮影、山古志地区は9月24日に撮影されたシーンです。いずれもある波長とタンパク含有率との間には有意な相関関係を示しました。今回、使用した衛星は2m×2mが識別できるGeoEye1衛星です。この衛星の解像度は、山古志に多い棚田でも十分にその位置が把握できます。水田の反射値からタンパク含有率を区分して水田上に表示することで、タンパクが多い地区、比較的タンパクが少ない地区が見ただけで識別可能になります。もし、タンパクが多いと表示されれば、来年度、肥料を抑えることで、タンパク含有率の低下を図ることが可能です。衛星データは空中写真とは異なり、撮影される範囲が広く、広範囲のタンパク分布状態の把握が可能とな

ります。稲の葉色は例えばSPAD計を用いても解析可能です。しかし、SPAD計を持ち、広く分布している水田を対象に、葉色を調べるのは容易ではありません。衛星データをを用いれば、効率的にタンパク含有率の表示が可能です。川口町、山古志地区いづれも、タンパク含有率が比較的高い地区、低い地区が見られます。稲のタンパク含有率は肥料の量だけでなく、土壌や立地因子も係わってきます。また、食味はタンパク量だけでなく、アミノ酸量にも影響を受けます。今回使用した水田はすべてコシヒカリBLです。新潟産のコシヒカリBLは非常に美味しい米です。この研究を行った理由は川口町、山古志地区共に中越大地震の被害が大きかった地区です。水田も大きく破損したり土砂が流れ込んだり、作付けが出来ない水田も多くありました。タンパク量に注意し、元々、美味しい米をさらに美味しくして売ること、少しでも貢献できればとの気持ちから研究を行っていました。

ペンリレー

## 同窓生からのたより

### 農政の転換の中で

— J A マンの独り言 —

横山 徹郎 (昭61農)



前回、本欄に登場された平野孝先輩 (昭和58農) から、ペンリレーをつなぐことになりました。平野さんらは新潟市江南区で農家が農産物を持ち寄る「カガヤキ農園直売所」を経営されていますが、その直売所に我が家で栽培したブルーベリーを出荷させていたでいてるのが縁で、お声掛けいただきました。

私は昭和61年に大学を卒業と同時に新潟県農業協同組合

中央会に入会。営農農政畑を中心に担当して現在に至っております。J A や連合会、県庁の方と仕事することが多いのですが、同窓生が大勢いて心強く感じております。

さて、昨年は年を表わす字が「新」だったことが象徴するように、政権交代が行われました。このことは農業やJ A グループも大きく影響してきています。つい数年前に戦後農政の大転換と称し、担い手に施策を集中する方向がとられました。新政策は全ての販売農家を対象とした戸別所得補償制度を進めようとしているからです。期待感がある一方で、新政策がどのような農業の将来像を描いていくのか、まだ見えないところに不安もあります。

これまでも農政は目まぐる

しく変わってきました。度重なる政策変更が行われるたびに現場は対応せざるを得ませんが、精神的にも制度的にも疲労が極限に達しつつある感があります。そうこうしているうちに地域農業の状況は、高齢化が着実に進み、農業生産力は減少をたどっており、山間地では消滅しつつある集落もあるといえます。私たちに

はあまり時間は残されていません。国は我が国農業のめざす姿とその道筋を明らかにし、政策がその手段とならんことを望みます。

ただ、そんな右肩下がりの農業界において、農産物直売所だけは右肩上がりです。直売所は特定の大規模な担い手だけでなく、むしろ小規模兼業農家や定年帰農者、女性を含む多様な農家が多品目を生産することによりに支えられています。さらに、このような多様な農家が現金収入を得る手段となり、栽培技術を磨く場や、地域住民と農業者との交流の場となったりと、さまざまな機能が注目されています。そして、安全・安心で新鮮な地場産の農産物を求める消費者の要求にこたえているのです。冒頭紹介した平野さんの「カガヤキ農園直売所」を見ているとそれを実感します。新潟県では直売所の取組みが相当遅れているのですが、J A グループとしてもテコ入れして地域農業の活性化を進めていきたいと思えます。



### 仲間たちは今

堀田 善之 (平5農工)



#### ① 近況報告

大学を卒業後、農業土木職で富山県職員に採用されて、はや十六年が経ちました。自分ではまだまだ若いと思っていますが、職場ではもう中堅層、初老です。まったく光陰矢の如しです。

仕事は、水路や大区画ほ場整備の他、多岐にわたる農業農村整備事業の施策立案や、調査計画から工事の設計積算、現場監督などが主な業務です。地元農家や土地改良区の方々と話し合い、作り上げた計画を現場に形として残すのですから、工事の大小にかかわらず日々精進しています。

また、私生活においては、  
女男女の三人の子供に恵ま  
れ、日々その成長する姿に喜  
びを感じながら、ささやかな  
家庭を築いています。

### ② 趣味熱中していること

九年前に自宅を新築した時  
に端材をもらったのがきつ  
けで、日曜大工にはまってい  
ます。DIY雑誌「ドゥーパ」  
を愛読し、妻には内緒で電動  
工具を着実に増やし、ホーム  
センター大好き人間になつて  
います。大作は家の周りの木  
製フェンス、鶏小屋、子供の  
木製ベッドや学習机も作りま  
した。仕上がった時に子供達  
から称賛を得た時、喜びもひ  
としおです。

### ③ 最近感動したこと

子供の言動には、いつも目  
を見張るものがあります。先  
日、せつせとペンキを塗って  
いた時のこと。四才の長男が、  
家から飛び出して来て言いま  
した。一人でやるより二人の  
方が早く終わるから手伝うと  
言うのです。まだまだ幼いと

思っていました。少しウ  
ルっときた瞬間でした。

### ④ 学生の皆さんへ

大学生活では是非色々なバ  
イトを経験して下さい。社会  
人になる前にバイトを通じて  
見聞を広め、自分に向き不向  
きな仕事を発見する良い機会  
だと思えます。そこで知り  
合った人から、教えられたこ  
と、叱られたこと、後で役立  
つ事がきつとあると思いま  
す。

### ⑤ 次回の執筆者の紹介

一年後輩の原田太輔さんに  
お願いしたいと思えます。彼  
は工和会会長を務め、農学部  
運動会で農業工学科をまとめ  
優勝に導くなど、明るさと包  
容性に溢れた人間味のある人  
です。



## 第2の人生を 前にして

佐々木一恵 (昭49畜産)



早いもので、畜産学科を卒

業し、地元、福井県に勤めて  
30有余年。もう、定年退職が  
目前にきています。同期の卒  
業生は、全国各地に、散らば  
りました。しかし、福井にい  
ると、各種のイベント、シン  
ポジウムなど、甲信越・北陸  
地域をブロックとして開催さ  
れる催し物も多く、卒業後も  
大学の先生方、先輩、後輩と  
お会いする機会は多く、各県  
持ち回りで開催される、畜産  
学会などでは、お元氣そうな  
お顔を拝見できる機会が多く  
あります。

私も、福井県に奉職し、公  
務員の定めである人事異動に

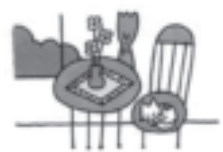
より、現在、三度目の畜産試  
験場に勤務しています。全国  
的な傾向ですが、畜産農家の  
減少が続いています。しかし、  
乳牛、肉牛、豚、鶏卵等、対  
象とする家畜はいろいろあり  
ますが、力を入れているのは、  
やはり牛肉です。福井は、関  
西圏ということで、牛肉の消  
費量は、豚肉、鶏肉に比べ、  
多くなっています。

もう定年退職まで残り少な  
い現在、「退職後の趣味」のネ  
タ探しをしています。田舎に  
住んでいますので、野鳥の観  
察にも興味があります。山歩  
きをしなくても、家のまわり  
には、見知らぬ鳥たちが遊び  
に来てくれています。観察対  
象にはこと欠きません。

また、近くに福井総合植物  
園があり、「雑草から貴重な植  
物」まで、いろいろな植物を  
見ることができ、同時に野鳥  
観察ができる場所です。そこ  
に行けば、貴重な植物と野鳥  
の両方に会うことができます  
ばらしいポイントです。自宅

から歩いて行ける場所にあ  
り、自然の起伏を生かした植  
物園であり、これも興味のある  
場所のひとつです。

まわりには、定年退職され  
て、悠悠自適の生活を楽しん  
でおられる方が多く、私もあ  
こがれています。野菜づくり、  
花づくりなど、少ない量でも  
販売スペースをもつことがで  
きる、農協の農産物直売所が  
各地に作られています。楽し  
みながら野菜づくり等を行  
い、自家消費できないものは、  
直売所で販売する。体力作り  
のため、ウォーキングをする  
のもよし。昨今のシステムを  
利用しながら、人とのつなが  
りを、隣近所から、地域また  
は町内へと範囲を広げ、健康  
で、元氣な生活にあこがれて  
いる最近です。



# 農学部フォーラム 朱鷺メッセマリンホールで開催

第15回農学部フォーラム実行委員長

## 三ツ井 敏 明

第15回農学部フォーラム「米品質と温暖化」が11月28日（土）に朱鷺メッセ（マリンホール国際会議場）で開催されました。今回は、新潟大学農と食のスペシャリスト養成センター共催、また新潟県、新潟市、新潟日報社、（財）佐々木環境技術振興財団後援でフォーラムが実施されました。フォーラムには、JA、企業、高校教員、県研究機関、一般市民、学生、大学関係者など約150名の来場がありました。

近年、地球規模の気候温暖化が深刻な問題となってきました。イネ登熟期の異常高温は玄米に白濁、充実不足や胴割れを多発させ、玄米品質の低下により一等米比率を低下させます。このような高温被害米の多発は米生産農家の収入に直接影響するだけでなく、産地のブランドイメージを壊すことにもなりかねず、

生産現場では極めて深刻な問題となっています。温暖化はさらに進行すると予測されていることから、高温下でも玄米品質が低下しない高温耐性品種の育成と高温被害を軽減または回避する栽培戦略の確立が緊急の課題となっています。本フォーラムでは、各方面の米研究の専門家に話題提供いただき、米生産、米品質という視点から気候温暖化を考えることを趣旨としました。

大山卓爾農学部長の開会挨拶、渡邊剛志新潟大学農と食のスペシャリスト養成センター長の挨拶に続いて、講演がはじまりました。近藤始彦氏（独）農業・食品産業技術総合研究機構作物研究所は、「高温が稲の生育と米品質に及ぼす影響」と題して、現在日本やアジア各地で顕在化している高温による白未熟粒や胴割れ粒の発生など米品質低

下の問題の現状やその要因について説明されるとともに、今後さらに高温化が進行した場合に想定される収量への影響や対策についての紹介がありました。桑形恒男氏（独）農業環境技術研究所は、大気中の二酸化炭素濃度の増加と高温ストレスの複合的作用の観点から「地球温暖化が米生産に及ぼす影響」について解説されました。私からは、高温登熟による白未熟粒発生メカニズムの理解はどこまで進んでいるのか、「高温登熟被害発生の謎」にどこまで迫ることができているのか、高温耐性品種の開発に必要不可欠な基礎研究の現状について紹介しました。また、福山利範教授は「高温登熟性に優れるイネの開発を目指して」先端的

産部経営普及課）が、「新潟県における農業現場での温暖化の影響について」の紹介があり、コシヒカリ生産者が取るべき栽培管理策や高温登熟性を改良した早生品種「こしいぶき」及び「ゆきん子舞」の育成、普及奨励の紹介がなされました。

それぞれ興味深いお話の後、大坪研一教授がコーディネーターをつとめられた総合討論では、酒米を含めた米品質と温暖化について様々な質疑応答があり、活発で有意義な討論が行われました。参加者のアンケート調査においても、「タイムリーで良いテーマである」、「食及び農と環境に関する問題を認識することが

## 農学部での国際交流について

農学部国際交流委員会委員長

## 中野和弘

本年度における農学部の国際交流の主な動きをご報告いたします。

本年度は、農学部との国際交流推進のために、例年と比較してはるかに多くの外国大学と往来がありました。

出来て非常に有意義であった」など全般に好評でありました。最後に、小島康夫農学部副学部長の開会の挨拶でフォーラムの幕が閉じられました。



まず、特筆すべきこととして、平成21年9月の第3回農学部国際シンポジウム「アジアにおける食料・農業・環境の持続可能性」が挙げられます。このシンポジウムは、農学部と大学院自然科学研究科

が主催して、学術交流協定を締結している海外の大学を招聘するものです。2年ごとにホーム・アンド・アウェイ方式で開催しており、本年度は新潟大学総合教育研究棟（旧教養棟）が会場となりました。

海外からは、学術交流協定を締結している大学として、

ポゴール農科大学（インドネシア）、東北農業大学（中国）、モンゴル国立農業大学（モンゴル）、嶺南大学校自然資源大学（韓国）、チエンマイ大学（タイ）およびワーヘニンゲン大学（オランダ）の6大学、さらに本年度協定を締結する中国農業大学（中国）とキングモンクトン工科大学トンブリ校（タイ）の2大学を招聘しました。開会式では、大山卓爾農学部長、下條文武学部長、野中振拳新潟市農林水産部長、坪川紀夫自然科学研究科長の挨拶や祝辞がありました。期間中の参加者は総数約200名。なお、今回は平成23年、東北農業大学（中国、ハルビン市）で開催することになりました。

Igor Danilin（ダニリン）教授

（GIS・地理情報学部長）が来訪され、特別講義「シベリアの森林・自然史」を開講されました。12月には、東北農業大学（中国、ハルビン市）の

の教長林（オウ）教授（農業工学学院）が来訪され、特別講義「ニューラルネットワークに基づくトラクタ信頼性モデルのパラメータ推定」を開講されました。さらに、2月にはアンカラ大学（トルコ）のOguz Can Turday（ジャン）先生（農学部土壌学）が来訪され、特別講義「アジアとヨーロッパの大陸が出会う国トルコでお会いしましょう」を

開講されました。3月にはチエンマイ大学（タイ王国）のSoraya（ソラヤ）准教授（農学部、土壌肥料学）、Darat Boonyakiat（ポニーヤキヤット）准教授（農学部副学部長、貯蔵工学）が来訪され、それぞれの研究に関連した特別講義を開催される予定です。

8月には、大山学部長と中野国際交流委員長がクラスノヤルスク国立農業大学とシベリア国立連合大学を訪問し、交流協

定締結に関する情報交換と検討を行いました。

11月には、農学部在籍する留学生のための見学・実地体験旅行を行いました。例年は、新潟県内の関連施設の見学が多かったが、本年度はつくば市まで足を伸ばしました。農林水産省「食と農の科学館」を訪問し、国際農学ESDシンポジウム（於：筑波大学）を聴講した後、（独）国際協力機構JICA筑波国際センターを見学しました。この旅行には、日頃、研究室で留学生を世話している日本人



農学部国際シンポジウムでの懇親会（平成21年9月、新潟大学第一食堂）

大学院生も同行し、友好関係がさらに深まりました。

12月には、恒例の農学部留学生と指導教員との交歓会が開催されました。昨年に引き続き、本年も留学生の家族や国際交流に貢献している日本人院生・学部生も参加し、他学部も羨ましがら賑やかな夕食会となりました。

なお、現在、農学部と国際

## 中越大地震関係活動報告

「越後8（えちごや）」代表

農学部農業生産科学科4年 吉岡 菜里子

私達「越後8（えちごや）」は、農学部の学生を中心に、経済学部、理学部、教育学部などの様々な学部の学生27名で組織され、中越大地震で被災した、中越地方の集落・地域を中心に活動しています。

2008年の大学祭の一環として行われた、新潟大学農学部・災害復興センター主催「中越大地震復興集落との交流企画」で、集落の特産品の販売を学生がお手伝いしたことがきっかけで、多くの学生が中越大地震で被災した集落やその活動に興味を持つよう

交流を締結しているのは8大学ですが、来年度はさらに多くの大学と協定を締結する動きがあります。

このように海外学術交流においては、教員はもとよりその研究を支える学生・院生も海外訪問や共同研究の機会が多くなり、国際交流は今後、ますます盛んになるものと期待されます。

になりました。そして、大学祭後も集落の皆さんとの縁を大事にしたいとの想いから、この団体が起ちあがりました。また、この「越後8（えちごや）」という名前は、昨年の大学祭で参加した7つの集落に、私達の団体を加えた計8つの集合体が、「新潟の地で、ずっと繁栄してほしい」という思いを込めてつけられました。

2008年に引き続き、2009年も越後8は、大学祭で集落の特産品販売を行いました。当日はあいにくの雨模



様にも関わらず、多くの方々  
に足を運んでいただき、特産  
品販売は大盛況でした。そし  
て今年は、川口町木沢集落に  
伝わる伝統的な木沢太鼓と盆  
踊りも披露しました。毎日遅  
くまで練習した甲斐あって、  
本番は集落の皆さんと学生が  
一緒に楽しく踊ることがで  
き、多くの学生や地域の方々  
に拍手をいただいで、忘れら  
れない思い出になりました。  
また、2009年は初の試  
みとして、魚沼の越又集落で  
田んぼを借りて、お米作りを

行い、その一部を、昨年の夏  
に水害に遭われた兵庫県の佐  
用町に寄付させていただきま  
した。それから、災害復興セ  
ンターと越後∞共催で「地域  
への想いを紡ぐ」と題し、県  
内外で地域復興やボランティア  
に取り組んでいる学生団体  
(金沢大学、長岡技術大学等)  
を集め、シンポジウムも開催  
しました。「被災地域との関わ  
りからわたしたちができるこ  
と」というテーマでの意見交  
換は、時間が足りなくなるほ  
ど白熱し、とても有意義な時  
間を過ごすことができました。

このように、多く  
の方々にご支援をい  
ただいて、私たち越  
後∞は現在まで活動  
が続いています。  
学生の私たちにで  
きることは、ほんの  
小さなことかもしれ  
ませんが、私たち越  
後∞は今後も、集落  
そして周りの方々と  
の縁を大切に、学  
生の視点から、集落  
の魅力を皆さんに伝  
えていきたいと思っ  
ています。

## 学部だより

### 新任教員紹介



生産環境科学科  
准教授 長谷川 英夫

平成二十一  
年三月十六日  
付にて着任い  
たしました。

出身は愛知県で、大学進学後  
の二十二年間をつくばで過ご  
しました。専門は生物生産機  
械学であり、次世代のオフ・  
ロード車両開発、農業従事者  
の高齢化と担い手の減少に対  
応する農作業の自動化、ロ  
ボット化に関する研究、そし  
てバイオマスを活用したエ  
ネルギー環境教育に関する研  
究を行ってきました。  
着任後は第三回農学部国際  
シンポジウムの事務局長を  
早々に仰せつかり、慌ただし  
くも充実した一年を過ごさせ  
ていただきました。その際、  
農学部同窓会の皆様からシン  
ポジウム運営に係る多大なご  
協力を頂きましたことをここ  
に記してお礼申し上げます。

前任校で十一年間  
に渡って企画・運  
営してきたユネス  
コの国際教育協力

事業の実績と経験を生かして  
本学のより一層の国際化に微  
力ながら貢献していきたいと  
考えています。よろしくご指  
導のほどお願い申し上げます。

### 農学部の動向

#### 学会開催、学会賞等の受賞

- 楠原征治名誉教授  
(農業生産科学科)  
平成21年度日本養豚学会功労  
賞
- 四肢強健性を高めた優良系統  
豚の作出と技術者の養成  
木南莉莉教授  
(農業生産科学科)  
10月11日第18回日本地域学会  
学会賞(論文賞)を受賞
- 細江実佐  
(平3年畜卒、平5年院農)  
平成21年度日本生殖医学会学  
術奨励賞  
小柳 渉  
(平元年農化卒、平3年院農)  
平成21年度日本土壤肥料学会  
技術賞

正四位瑞宝中綬章  
田中啓達名誉教授  
(農芸化学科応用微生物学・11  
月12日死去、死亡叙勲)

#### 学位取得

- 農業生産科学科関係  
平野信之  
(昭55年農卒、昭57年院農修  
了)
- 博士(農学) (新潟大学)  
竹内一成  
(平16年農生卒、平21年院自修  
了)
- 博士(農学) (新潟大学)  
笹原英樹  
(平6年農卒、平21年院自修  
了)
- 博士(農学) (新潟大学)  
樋山伸二  
(平7年農生卒、平9年院自修  
了)
- 博士(学術) (新潟大学)  
応用生物化学科関係  
西脇俊和  
(平4年農化)
- 博士(農学) (新潟大学)  
南雲芳文  
(昭61農化)
- 博士(農学) (新潟大学)  
久保田真敏  
(平15年農化卒)
- 博士(学術) (新潟大学)

小林 裕之(平16応化卒)  
博士(学術)(新潟大学)

「学会等開催」

(生産環境科学科)  
「日本景観生態学会 第19回  
新潟大会(2009年6月  
26〜28日)」  
大会会長・紙谷智彦 教授  
(昭50林卒)

新潟大学地域連携フードサイ  
エンスセンター シリーズ講  
演会第12回

「これからの食育のために」  
食の専門家の視点から学ぶ  
―(21年6月27日、会場・新  
潟大学教育学部大講堂)

新潟大学地域連携フードサイ  
エンスセンター特別シンポジ  
ウム

第3回「にいがたからの発信  
『避難生活を支える災害食』  
災害時の健康を守るには:  
防災、福祉、食の観点から、  
災害食のあり方を提言す  
る」(21年10月17日、会場・  
新潟市民プラザ)  
第4回「あなたの被災生活を  
支える災害食」『非常食』から  
『医療・福祉・保健機能を加え  
た災害食』へ(22年2月4日、  
会場・パシフィコ横浜)

退職

長年、当農学部のため多大  
な貢献をされた次の方々が平  
成22年3月に定年退職されま  
す。

農業生産科学科

教授 伊藤忠雄 先生

講師 樋浦善敬 先生

生産環境科学科

教授 阿部信行 先生

フィールド科学教育研究セン  
ター

教授 福山利範 先生

長年にわたり積み重ねてこ  
られたご功績に心から感謝申  
し上げます。ありがとうございます。

教員訃報

吉原 一郎 名誉教授(家畜  
飼養学) が平成20年10月27日  
ご逝去。

大河原昭二 元助教(運  
材工学) が平成21年3月17日  
ご逝去。

田中 啓達 名誉教授(応  
用微生物学) が平成21年11月  
12日ご逝去。

田先威和夫 元教授(農専・  
家畜飼養学) が平成21年6月  
18日ご逝去。

謹んでご冥福をお祈りいた  
します。

会員訃報

次の会員の訃報が事務局に  
届けられています。

笹岡 健一(昭25農専農)

百瀬 清喜(昭48農工)

金山 貴明(平7植物生産)

池田 正夫(昭28農学)

藤倉 朋良(昭34総農)

梶 正治(昭36農学)

謹んでご冥福をお祈りいた  
します。

新潟大学女性研究者  
支援のための人材バ  
ンク登録へのお願

新潟大学女性研究者支  
援室からの依頼を受け、  
全学同窓会として人材バ  
ンクの整備に協力するこ  
とになりました。この事  
業にご協力いただける方  
は人材バンクへ登録くだ  
さるようお願いいたしま  
す。

詳しくは

女性研究支援室URL:

[http://www.niigata-u.ac.jp/  
joseishen/index.html](http://www.niigata-u.ac.jp/joseishen/index.html) に掲

載されております。

農学部ホームカミングデイ開催

平成21年10月18日に農学  
部ホームカミングデイが開  
催されました。ホームカミ  
ングデイとは、卒業生を始  
めとした農学部に関連した  
皆さんが、故郷に帰る気持  
ちで母校へ帰ってきていた  
だけ、親睦を深める企画で  
す。当日は、モンゴル農業  
国立大学学長ならびに多く  
の卒業生のご出席のもと、  
農学部の進学・就職状況や  
様々な教育研究プロジェクト  
の取り組みが紹介されま  
した。

当日のプログラム

テーマ「農学部は今」

9時30分〜9時40分

農学部部長挨拶(大山)

9時40分〜9時50分

農学部の進学状況につい

て(小島先生)

9時50分〜10時

農学部の就職状況につい

て(森井先生)

10時〜10時10分

農学部の国際交流につい

て(中野先生)

10時10分〜10時20分

ダブルホームの取組み

(紙谷先生)

10時20分〜10時30分

大学院G P 酒造プロジェ

クト(高橋先生)

10時30分〜10時40分

地域連携ビールプロジェ

クト(福山先生)

10時40分〜10時50分

ときプロジェクト(本間

先生)

10時50分〜11時

食品超高压プロジェクト

(西海先生)

11時〜11時10分

災害復興関係(三沢先生)

11時10分〜11時40分

農学部DVD 映写

